

日系アメリカ人二世たちの恩返し Ongaeshi by Japanese American Nisei

櫻井のり子*¹ 櫻井 孝昌*²

1. Youth is not youth if it is satisfied to leave things alone.¹⁾

「今、私達はこれから先に横たわっている大きな任務を当惑しながら見ている。世界は戦争と混乱によって損なわれ、社会的、経済的、政治的な再構築を必要としている。戦争が終わった今、国家間の争いの原因ともなる多くの事が残されている。多くのくすぶっているこれらの火種は、新しい文明のゴールに向かって進んでいく若い世代によって消し止められなければ大火になるだろう。この迷路から導き出すことが出来るのは、全ての国の若者たちである。私達は世界の現状をはっきり見て、広く考え、公正に判断し、大胆に行動することによって、より良い社会を目指すことができる。世界は若い我々の広い心、エネルギー、勇気、理想主義を必要としている。

もし、これからの社会で起こる事態をそのまま放置して満足しているならば、そのような若者は若者とは言えない。

豊かで充実した暮らしをしたいという夢をみんなが描いている。しかし、

*¹ 金城学院大学生生活環境学部教授

*² 金城学院大学キリスト教文化研究所客員研究所員



Digital image copyright 2002, Topaz Museum. All rights reserved

トパツ高校卒業式風景、卒業生がグラウンドに集合、1942年度（注：グレンさんの卒業年度とは異なる）

それは自動車や高い賃金などではなく、人々
がその生まれや地位に
よって差別されず、社
会の構成員として平等
に認められることであ
る。大きなものではな
く、より良いものを作
るために共に働こう。
より良いものとそのた
めの変化を受け入れよ
う。それを実現するた

めには犠牲も伴う。

私達は破壊された世界を堅固で公正な世界に再構築し、新しい世界を発見して行く努力をすべき世代である。それは奉仕の精神で行うべき事である。昨日の夢を離れて、明日の真実の夢を実現しよう。」

1945年6月、有刺鉄線で囲まれたアメリカ合衆国ユタ州トパズの日本人収容所内（Topaz Camp, Utah）にあったトパズ高校の卒業式で総代を務めたGlenn 'Rosie (Ryozo)' Kumekawa²⁾（以下グレン・クメカワあるいはグレン）のスピーチである。グレンはアメリカの日系二世（日本人移住者の子ども）として、両親が日本へ一時帰国中の1927年に横浜で生まれた。

1941年12月7日（アメリカ時間）、日本軍がハワイの真珠湾攻撃を行い、翌日アメリカが日本に宣戦布告した。翌1942年2月、アメリカ大統領令9066号によって、西海岸に住んでいた日本人移民120,000人は中西部の点在する収容所に送られた。そのうち日系二世は一世より30,000人以上多く平均年齢は17才で、2,500人以上が太平洋沿岸州の大学に在学していた。

クメカワ一家が2週間以内にサンフランシスコの自宅を出ることを求め

られ、有刺鉄線で囲まれたユタ州のトバズキャンプに収容されたとき、グレンは14歳であった。キャンプで3年間を過ごし、その間ユタ抑留センターに設けられたトバズ高校で教育を受けた。のちに彼はこの頃の気持ちを以下のように語っている。

「キャンプの外での高校生活の経験から、キャンプ内と外を比べ大きな違いを感じていた。フットボールやダンスなどのスポーツ、衣裳、卒業アルバムなどすべてが違っていた。いつも二世の高校生たちは『我々はアメリカ人だろうか?』と疑問を持っていて、それが大きな話題になっていた³⁾」。

その後、日系アメリカ人子弟たちに対する大学教育援助団体（NJASRC－後述）が創られ、グレンはその奨学制度によって1945年9月東部ニューイングランド地域のメイン州にあるベイツ大学（Bates College）に入学した。この援助団体はアメリカの教会組織や民間人によって運営されていたが、当時のグレンはそれについての知識を持たず、彼の大学も団体の紹介で決められたものであった。

2. グレン、キャンプを出る⁴⁾



グレン クメカワ
79才時の写真

実のところ、キャンプを離れることはグレンにとって大変怖い経験だった。強制された収容所生活だったが、そこは家族とともに馴染んだ安全な環境であり、そこを離れることは敵に囲まれ、どのような取り扱いをされるかも分らなかったからである。しかしグレンはその不安を乗り越え、冒頭のトバズ高校の卒業生総代スピーチで「平等で平和な社会を実現するための若者の役割」について力強く訴えたように、自らの新しい出発を決意

した。

大きな不安に反して、ベイツ大学での4年間の生活は素晴らしいものであった。知性的な刺激、大学らしい自由で協力的な雰囲気は心から求めていたものであった。彼は卒業後、ロードアイランド州のブラウン大学（Brown University）大学院に進学した（1951～1956）（M.A.）。博士課程の途中で州内のWarwick市に就職し、その後、ロードアイランド州知事の政策補佐（Executive Assistant intergovernmental Policy）やロードアイランド大学（University of Rhode Island）のコミュニティプランニング学科教授を務めた。（現在は同大学の名誉教授である。）グレンは第二次大戦中に日系アメリカ人収容所での生活を余儀なくされながらも、善意の奨学金によって大学で学ぶ機会を得て、アメリカ市民として働く事が出来た。

3. NJASRC:全米日系学生再配置会議について^{5) 6)}

－NJASRC : National Japanese American Student Relocation Council－

太平洋岸の日本人収容政策の中で学生たちの教育の機会を奪うことに対して危惧した人々は、彼らを大学に戻すための働きかけを政府に対して行った。その結果、収容所の日系二世たちの復学をすすめる全米日系学生再配置会議（NJASRC）が1942年5月29日に設立され、最初の代表にはハートフォードセミナリー学長のロビンス・W. バーストウ（Robbins W. Barstow）が就任した。この組織はクエーカー教団の組織AFSC（American Friends Service Committee）が、WRA（戦時転住局War Relocation Authority）の責任者となったミルトン S. アイゼンハワー等に依頼されてYMCA、YWCAや教会グループ、教育者、日系市民連盟、大学や学生等に寄付をよびかけ設立が実現したものである。この会は支援金を集めるほかに二世たちの受け入れについて大学に呼びかけ、学生たちの手続きを手伝い、彼らを勇気づけ続けた。大学の受け入れ条件は以下の3項目であった。

- (1) FBI（アメリカ連邦捜査局，Federal Bureau of Investigation）やWRAと日系二世たちや受け入れ大学との間で，NJASRCが相互の理解を取り付けること。
- (2) 日系学生の教育のための奨学金を得ること。
- (3) 日系学生の道徳心が向上し，より高度な高等教育の追求を促すこと。

NJASRCはこれらの条件が満たされ，学生たちが無事に大学に入学できるように働いた。最初の段階では受け入れを拒否していた大学も多かったが，NJASRCの働きにより1942年7月～1946年7月にアメリカ中央部のグレートプレーンズ地域にある州の50以上の高等教育機関が合計991人の学生を受け入れた。それらは，コロラド505，ネブラスカ197，ワイオミング83，テキサス73，カンザス42，モンタナ30，サウスダコタ29，オクラホマ22，ノースダコタ10の合計991人であった。その他の州も含めると680の大学で3613人の学生が受け入れられた。

4. NSRC Fund (Nisei Student Relocation Commemorative Fund, 日系二世学生再配置記念基金) の創設と活動⁷⁾



ノブ・クメカワ・ヒビノ

(1) NSRC Fund の誕生

1970年代の後半，アメリカの東海岸にあるニューイングランド地域にも日系二世達が住んでいたが，彼らはばらばらで，お互いには知らなかった。1976年，コネチカット在住のノブ・クメカワ・ヒビノはサンフランシスコで行われた日系人の退職者会議に招かれた。ノブはグレンの姉で，サンフランシスコから帰ると，ニューイングランド地域での退職者会議の設立を思い立って名簿作りを始めた。その結果，1977年にボストン大学で開かれたニューイングランド退職者会議の案内リストには65名の名前が掲載された。その後，彼ら“ニューイングランド二世の会”はピクニックや魚釣

りなどをしながら交流を楽しみ、お互いに共通の歴史を分かち合った。第2次大戦中に西海岸の自宅を追われ、トパズをはじめとする日系人収容所に収監されたことについても語り合った。会の内の何人かはNJASRCの助成で大学を卒業した人もいた。

ノブ自身はカリフォルニア大学バークレイ校に在学中、卒業まで1学期のみを残して収容所に移された。彼女は1943年、NJASRCの援助を受け、キャンプを出てニューイングランドのボストン大学に編入した。ノブはその後コネチカット州の銀行で、マイノリティ出身でかつ女性として初の理事となった。



ヨシ・ヒビノ
(1919-2011)

ノブの夫ヨシ・ヒビノは1940年にカリフォルニア州バークレイで育ち、カリフォルニア大学バークレイ校を卒業したのち、家族とともにトパズキャンプに収容された。その後、NJASRCの援助を受けテキサス大学大学院に進学した。1943年ニューイングランドのマサチューセッツ州ケンブリッジで、バークレイ校時代のガールフレンドであったノブと結婚した。その後、彼らはコネチカット州ポートランドに移り、子どもたちを育てた。ヨシはスポーツにも関心が強く、忙しい仕事の合間に地元のスポーツチームのコーチを務め、地域の信頼を得た。また、コネチカット大学の夜間法学コースで学び、1971年には法学博士号を得ている。

“ニューイングランド二世の会”結成後のある日、ノブとヨシのコネチカットの自宅にもう1組の夫婦が集まった。彼らは寿司や漬物をつまみながら、共通の思い出やアメリカの収容所政策への不満を語り合っていた。そのころ、アメリカではベトナム戦争終結後のポートピープルが話題になっていた。「こうやっておしゃべりするばかりでなく、何かできることはないか。東南アジアの難民の子どもたちを助けることはできないものか。

彼らは自分たちと同じ境遇ではないか。」と話し合い、彼らを助ける方法として、ささやかな支援組織を立ち上げることにした。大戦中のNJASRCの名前にちなんでNSRC Fund（二世再配置会議記念奨学基金）と名付けた。まず、“ニューイングランド二世の会”のリストにあった65名に寄付を呼び掛けるとともに、ノブはフーヴァー研究所（スタンフォード大学内、戦争、平和、個人の自由等を対象とする研究所）に出かけ、そこに保管されていた第二次世界大戦中の日系二世の教育を支援したNJASRCの寄付者名簿及び二世学生の名簿を入手して持ち帰った。ノブは当時の寄付者リストを見て戦時中に自分たちを支えてくれた人たちがいかに大勢いたのか知って、その思いやりに感謝した。そして、彼女はリストの人たちに寄付をお願いする手紙を書いた。名簿に名前があった人たちこそ、現在のNSRC Fundの寄付者である。その後、ノブは6年間NSRC Fundの役員として、夫のヨシや自分の娘ジーンと共に一生懸命働いた。



メイミ・キシ・ノダ
(1919-2006)

ヒビノ夫妻とともに、会の設立に尽力したもう一組の夫婦は、メイミ・キシ・ノダとラファイエット・ノダであった。メイミはカリフォルニア州リビングストンに近い町で生まれた。そこは1906年のサンフランシスコ地震の後に日本人によって開拓されたヤマトコロニーと呼ばれ、農場と地域教会が中央にある日本人社会であった。メイミは1941年にサンジョセ（San Jose）にある州立大学音楽専攻を卒業し、その後コロラドのアマチュエ（Amache）キャンプに収監された。彼女は夫とともに常にNSRC Fundの仕事を最優先にして暮らし、Fundの奨学金を受けた学生たちと温かい友好関係を保ち続けた。

メイミの夫のラファイエットもカリフォルニアのヤマトコロニーで生まれ、1939年にカリフォルニア・パークレイ校を卒業、化学と果物生産を専攻した。開戦のあと、サンタアニタ収容所（カリフォルニア）に抑留され



ラファイエット・ノダ
(1916-2013)

た。その後、ワイオミング州ハートマウンテンを経てコロラド州アマチュエで家族と合流した。1943年、アマチュエを出てペンシルベニア州クエイカースタディセンターで、UCLAで始めたテーマの修士論文を完成させた。1945年にカリフォルニアに帰って、スタンフォード大学から生化学のPh.Dを得た。1947年にメイミ・キシと結婚し、1957年ニューハンプシャー州ハノーヴァーに移り、ダートマス大学メディカルスクール教授となった。また、彼は20代でクエイカー教徒となり、その後の70年間妻と共にその精神に生きた。1970年の後半からヒビノ夫妻とともにNSRC Fundの創立を計画し、初代会長となった。親切、寛容、平和をモットーに妻と協力して働き、東南アジアから移住した貧しい学生達を助け続けた。

(2) 日本人の“恩返し”の思想

NSRC Fundの創設者達は創設理由を「日系二世達が第2次大戦中にアメリカで受けた思いやりに“報いる”ため」と説明している。これは日本人の“恩返し”の思想が基になっている。彼らが発行しているNSRC Fundのパンフレット³⁾の標題で、

“Salvage and Ongaeshi (Repaying a Kindness)”

The WW II College Nisei and the Southeast Asian Boat Children”

と表示していることから、恩返しの思想が強く働いていることが分かる。“恩返し”については、以下のように説明されている。

“恩返しは受けた者が自らに対してそれを返すことを強いる思いであり、モラルとして避けられないことのように感じる。恩返しは感謝の気持ちと結び、喜びともなる。恩返しは与える側と受ける側の人々を強く結びつけ、その関係は忘れられることがない。”

このような思いから始められた“恩返し”は創立34年後の現在も続いている。

(3) その後のスタッフ達



NSRC Fund 組織メンバー、25周年記念
(2005年度NSRCF ニュースレター)

創設されたNSRC Fundはアメリカ東海岸のニューイングランド地域に住む日系二世達を中心に徐々に支援者が増え、その活動も盛んにおこなわれた。創立25周年を迎えた2005年度NSRC Fundスタッフの写真を示す。グレン（右から3

人目）は2002～2008年度にNSRC Fundの第3代会長を務めた。第2次大戦当時行われたアメリカ人による日系二世への教育援助の精神が、日系二世たちによって受け継がれ、それが次世代の日系人達にも引き継がれている。現在の理事の多くは三世たちが担っている。

(4) NSFC Fund の運営⁸⁾ —アメリカ在住の東南アジア人を対象とした奨学金制度—

1983年以降のアメリカではこのFundが東南アジアからの移住学生を対象とした重要な就学援助組織の役割を担っている。Fundへの申請、審査と選考、奨学金の授与等は地域の授与委員会が行っている。奨学金授与者の募集は、対象とされる地域に住んでいる東南アジア出身の高校生たちに公表されていて、奨学金は一人当たり250～2,000ドルの範囲で授与される。対象地域はシカゴ、シアトル、ニューヨークなどアメリカ合衆国の28の都市や地方の町の東南アジアコミュニティである。2013年はヒューストン（テキサス地域）、2014年はヒッコリー（ノースカロライナ）が対象と

なっている。奨学金の授与者はベトナム人、カンボジア人、モン族とラオスの学生などであり、1980年に援助を開始してから2013年度までに775人の学生に758,800ドルが授与された。2010年のNSRC Fund 30周年記念に集った奨学金受給者達の写真を示す。これらの行事は毎年行われ、奨学生とNSRC FUNDスタッフの交流も計られている。



NSRC Fund 30周年記念祝賀会
2010年ワシントンDCにて、50,000ドルの奨学金授与
2010年度NSRCF ニュースレターより

おわりに

第二次大戦中に強制収容された日系アメリカ人二世たちは、アメリカの市民権を持っていながら、敵国人として扱われ、理不尽な思いに大きな苦しみと屈辱を味わったに違いない。しかしその一方、キャンプの若者たちがアメリカ国内の人々による奨学金制度によって、大学教育を受ける機会を与えられたという事実は、彼らが戦後再びアメリカ市民として受け入れられるための重要な素地となったといえる。

それから35年を経て、彼らは厳しい環境にある東南アジアからの難民の子どもたちに対する“恩返し”の奨学金制度を立ち上げた。戦時下において“敵国に通じるもの”とみなされた日系人の子弟に対し、アメリカの教

会や大学関係者、その他の多くの人々が思いやりを持って支援の手を差し伸べたことが、時を経て“恩返し”の新たな支援へとつながった。このことは、ともすれば自分のことしか考えない風潮の中で大へんまれなことであると同時に希望への光を見る思いがする。さらに、この組織を立ち上げ運営している人々の気持ちや、次の世代や友人のアメリカ人たち、奨学金を受けている東南アジアの若者たちにも広がろうとしている。このことが平和を愛し人種差別のない、より良い世界を築いて行く力になり、“恩返しの連鎖”が今後も受け継がれていくことを心より願うものである。

あとがき

1989年の秋、筆者の櫻井孝昌が文部省在外研究員としてアメリカ合衆国東海岸部のロードアイランド州立大学に派遣され、家族とともに着任した際に、グレン・クメカワ氏一家と初めて出会った。到着したばかりで、右も左も分からない日本人家族にいろいろ親切に手を差し伸べてくださったのが交流の始まりであった。ロードアイランド大学にやってくる日本人の学生や研究者のほとんどが同じようにグレン氏と佳子夫人にお世話になっていたのである。

グレン氏は母親がメソジスト派のクリスチャンであったため、子どもの頃にサンフランシスコの教会に親しみ、大学時代は若者のグループでキリスト教活動を行っていた。現在はUnited Church of Christの教会員であり、日常はロードアイランド州のキングストン教会（Kingston Congregational Church）の礼拝に出席している。

当時は戦争中の境遇についてあまり詳しく聞くこともなかったが、その後2008年3月に櫻井のり子が金城学院大学の海外研修派遣プログラムで同大学に滞在する機会を得たことで、親しい友人として再び交流の機会を持つことができた。グレン氏からNSRC Fundについて何度かお話を聞いて興

味を持った。彼によると、日本人は戦時中の日系人強制収容所のことについては関心を持つようだが、NJASRCによって多くの日系アメリカ学生が高等教育の機会を得たという話にはあまり関心を示さない。キャンプ体験者の集りに取材に来た日本人記者たちにも話したが、興味はなさそうだった。グレン氏は「キャンプの経験は理不尽ではあったが、一方で自分たちの将来を気にかけてくれる人もいた。そのおかげで今の自分たちがある。NJASRCの活動及び、感謝の恩返しとしてのNSRC Fundのことを日本人にも知ってもらいたい」と話された。なかなか期待に添うことができなかったが、帰国後5年を経てようやく原稿にすることができた。少しでも多くの人々に知って頂くことができれば幸いである。

また、発表の機会を与えて下さった金城学院大学に対して、心より感謝致します。なお、グレン氏は現在87才になられるが、一昨年病で倒れ現在はリハビリ治療中である。一日も早い回復を祈っている。佳子夫人、子息Kenneth氏にはいろいろと補足資料等をお送り頂くなどし、合わせて感謝致します。

参考資料

- 1) Expects from the Valedictory Speech by Ryozo Kumekawa, Topaz High School Graduation, June 1, 1945
- 2) <http://sojo.net/magazine/2006/06/inside-man>
- 3) NSRC Fundパンフレット : Salvage and Ongaesi 【Repaying a Kindness】. The WW II College Nisei and the Southeast Asian Boat Children.
- 4) Inside Man by Glenn Kumekawa : Sojourners, Japanese American internment camp survivor reflects on Guantanamo, <http://sojo.net/magazine/2006/06/inside-man>
- 5) <http://plainshumanities.unl.edu/encyclopedia/doc/egp.asam.017>
- 6) <http://www.nsrcfund.org/history.origins.php>

日系アメリカ人二世たちの恩返し

- 7) <http://nsrfund.org/history.php>
- 8) NSRC Fund NEWSLETTER Vol.21, <http://www.nsrfund.org/documents/2013NSRCFundNewsletter.pdf>